

武蔵野女子大学文学部紀要 第2号 2001年 抜刷

近代初期イングランドの民衆娯楽  
—LancashireのRushbearingとBearbaiting—

末 松 良 道

# 近代初期イングランドの民衆娯楽

—LancashireのRushbearingとBearbaiting—

末松良道

## はじめに

トロント大学出版局より順次刊行されつつある『イングランド初期演劇資料集』(*The Records of Early English Drama*、以下REED)は、中世・ルネッサンス演劇や文学の研究者の視野を一挙に広げたが、また、そのことにより、とまどいも与えていると言って良いだろう。このシリーズは、トロント大学のAlexandra Johnstonなど、イングランドのコーパス・クリスティ劇の研究において顕著な成果を上げた研究者が中心になって始まったと思われる。私自身も含めて、シリーズに関心を持っていた多くの研究者は中世演劇の研究者であり、従って、シェイクスピア以前のイングランドの演劇資料、特に、コーパス・クリスティ劇の4大サイクルや、その他、台本の残っていない、あるいは断片しか残存していないサイクルについてのより詳細な上演状況などの発掘に大いに期待していた。数百年まえのことであるから完璧を望むのは無理なこととしても、そうした期待はYorkやChesterの巻においてかなり満たされており、また、他の巻においても、聖史劇についての新たな発見が多く見られる。例えばREED刊行以前と比べて学界の聖史劇についての見方の大きな違いとしては、Yorkのようなスケールの大きな、天地創造から最後の審判までといったサイクル形式の上演は、かつて推測されていたような一般的なものではなく、York、Chester、Coventryといったイングランド中部以北の幾つかの大都市に見られた形態であると考えられるようになった。南部の都市でも、聖史劇は多く見られるが、それらはより小規模のものであり、長大なサイクル形式を取るのが普通であったとは言えないようである。

そうした演劇そのものに関する記録の発掘に加えて、REEDがめざしているのは、演劇のすそ野を形成し、ステージの構成要素として色々な影響を演劇に与える諸芸能の記録である。音楽、教会や村々の種々の祭や慣習、王侯貴族の都市入場などの演劇的な儀式、動物を使った芸能、アクロバットなどの曲芸等々、それらは実に多岐にわたる。そうした芸能は広く中世及び近代初期の芸能の全体を包含し、また、あまり知られていない民衆文化の多くの相に照明をあてており、単に"Early English Drama"とその関連分野を越えた資料を提供しつつある。従って、現在REEDは単に文学史や演劇史の研究者だけでなく、社会史、音楽史、芸能史、民俗学その他の学問分野の研究者に、これまで写本のまま埋もれていたか、論文における紹介等で断片的な形でしか見ることが出来なかった貴重な第1次資料を提供している。

その一方で、従来からの演劇や文学の研究者もテキストだけでなく、広く各時代の芸能などを参照しつつ作品を論じることが一層必要になったことは言うまでもない。さらに、演劇の研究者達は、REEDの頁をひもとくうちに、そこに記されている芸能や民衆娯楽そのものが十分に独自の文化現象として記録され、検討に値するものであると考えられるようになってきた。それらは、例えば「シェイクスピアにおける民衆娯楽」といった、文学作品の背景としての扱いに終わらず、それら自体で研究さ

れるに値する。そして、シェイクスピアやその他の演劇テキストも、そうした文化史的資料の一環として扱うこともできるだろう。筆者は、もちろん文学作品を社会史研究の資料の1つに過ぎない、と主張するつもりは毛頭ない。しかし、*REED*の各巻は「初期演劇資料集」という枠組みを越えた検討を要求しているのは明白であり、*REED*に記録されている文化現象が否応なくそれを求めていると言つて良いだろう。

さて、私はこの小論で*REED*の中から、イングランド北西部の州、Lancashireを扱った1巻を取り上げて、そうした民衆娯楽の一端を紹介する。Lancashireの記録は、大きな都市の演劇に関する記録よりも、小さい町々の芸能の痕跡を多数含んでおり、本論のテーマである「近代初期の民衆娯楽」にふさわしい資料と言える。これからも続々と刊行される*REED*の膨大な資料のごく一部ではあるが、そこに垣間見える民衆の娯楽は実に興味深い。本論では、限られた紙面の中で刊行されている論文と*REED:Lancashire*の1次資料から、rushbearingとbearbaiting（熊いじめ）に限定して解説し、演劇史研究のすそ野をを広げてみたい。

## 1 Rushbearing

従来の演劇研究では見落とされていた興味深い風習にrushbearingがある。日本語の辞書では次のような翻訳と解説がある：「教会献堂記念祭（イングランド北部で行われる年中行事で、この日村の人たちがイグサ[rush]や花を取ってきて、教会の床にまいたり壁に飾ったりする）」（『研究社新英和大辞典』第5版）。つまり、教会でも民家や貴族の館でも、中世や近代初期には床の多くが土間にしか過ぎなかったし、城館においても石が敷かれていたので、その冷たい床をいくらかでも快適にするため、その上にイグサやわらの類を敷いており、それを取り替える作業が必要であったわけである。日本における畳替えのような、生活に必要な仕事の基本であると考えて良いだろう。しかし、日本語訳でも「記念祭」としているように、これは一種の儀式化を経てかなり盛大な行事になっていた。多くのマナー・ハウスでは、そのために特別の役職を設けていたほどである（George 1996, 17）。*REED:Lancashire*において、その記述は驚くほど頻繁だ。*REED:Lancashire*の編者、David Georgeはこれに注目して、彼の編集した資料集とは別に、rushbearingについて論文を出版して紹介している（George 1996）。

*REED:Lancashire*における具体的なエントリーの1例として、Childwallの町の教会、All Saintsにおける1622～23年の会計簿をあげると：

Item spent att Childwall being there to see Rushes brought to the Church in decent manner, from litle Wolton

vj d.

Item an other tyme, when wauertry townshipp did bring Rushes

vj d.

Item when Muchewolton and Litle Wolton brought Rushes

vj d.

(*REED:Lancashire* 10)

このように、教会にとって必要なイグサは、近郊の町からさえ、運ばれてきたことが分かる。もし、

教区民がこうした作業をいとうようなことになれば、教会は、まるで長らく畳替えを怠った寺社のように荒れることにもなろう。事実、Pentworthamの町の1608年における巡回裁判では、Faringtonの町の町民の一部が教会にイグサを納めることを怠ったとして告発されたとの記録もある（*REED:Lancashire* 75）。

しかし、教会の施設維持のための必要性とは別に、多くの記録はrushbearingが娯楽性を大いに含んだ慣習であり、そのために利益を受ける当の教会にとってさえ、いささか騒々しすぎる迷惑な慣習になった場合もあったことを物語る。他のエンタテイメントにも言えることだが、安息日を守らずにこの行事が行われ、しかも、騒々しい、という記述が目につく。Goosnarghの1611年の巡回裁判記録でも安息日の蹂躪と教会での笛の演奏が取りあげられている：

*Contra Curatum predictum*

for warninge the rushbearinge on the Sabboath daie beeing admonished to the Contrarie by reason whereof there was pypinge in the Church and Church yord (*REED:Lancashire* 24)

安息日にこの行事を行えば、当然教会のお勤めとぶつかる時もあるだろうし、実際、Ecclesでの教会裁判の記録にもそれがうかがえる：

*Officium domini contra gardianos de Eccles presentment maide for bearing Russes in service tyme to the disturbance therof comparuerunt gardiani and ar monysshed to beare Russes henceforward if they beare anye so that no Disturbance be had of service there sub pena excommunicacionis* (*REED:Lancashire* 18-19)

"pena excommunicacionis"が実際に適用されたかは別としても、このような強い言葉を使ってrushbearingが安息日や教会のお勤めを乱すことを禁じた背景には、この慣習がかなり人気の高いものであり、当局が禁じて、なかなか騒々しくなることを押さえられなかったのではないかと推測される。*REED:Lancashire*の記載だけでは、より具体的な様子は分からないが、rushbearingのイグサやわらを乗せた荷車（rushcart）は花やリボンなどで飾り付けをされ、イグサそのものも凝った形状に形作られた。rushcartは教会にたどり着く前に、教区を練り歩いたが、これは、Corpus Christi ProcessionやCorpus Christi Playsなどでもお馴染みの、中世・近代初期における祝祭のやり方である（Simpson and Roud 303）。rushcartの行列は、このように、祭の山車に相当する一種の見せ物となつて、人々に祝祭的な楽しみを与えたに違いない。Corpus Christi Playsの山車、Plough Mondayの鋤、五月祭のmay pole等と並んで、rushecartも祝祭に格好の焦点を提供したのであろう。rushというものの性質から、may pole等のように一種の豊穡儀礼的な意味を感じさせる面もあるかもしれない。さらに、この行列はしばしばダンス、特にモリス・ダンスや、既に引用した一節でも分かるように、音楽も伴っていた。1618年、CheshireのBunburyではbearbaitingを伴ったとの記録もある（Baldwin 1997, 28）。更に教会や教会の庭では、飲食物が振る舞われることもあり、劇的なエンタテイメントと宴会が行われたと言うこともできるだろう。

この慣習のエンタテイメント性は、これが本来の実利的な役割を離れて使われたり、その必要性が薄れた後も存続したことでもうかがえる。David Georgeも論文で指摘しているように（George 1996, 22）、1617年8月17日にはLancashireのNicholas Asshetonが彼の屋敷でジェームズ1世をもてなした

折、王のためのロイヤル・エンタテイメントの1部としてrushbearingのモチーフが使われたが、これはもちろん実利のためではないだろう：

Wee served the lords with biskett, wyne, and jellie. The Bushopp of Chester, Dr. Morton, preached before the King. To dinner. About 4 o'clock, ther was a rushbearing and pipeing afore them, affore the King in the middle court; then to supper. Then, about ten or eleven o'clock, a maske of noblemen, knights, gentlemen, and courtiers, afore the King, in the middle round, in the garden. Some speches: of the rest, dancing the Huckler, Tom Bedlo, and the Cowp Justice of Peace. (REED:Lancashire 146)

音楽 ("pipeing") や仮面劇、ダンスを交えた笑劇と思われるものと並んで、rushbearingが王を楽しませている。王自身、彼の*Book of Sports* (1618) において、この慣習に触れて、これを日曜日に開催することを許すとしているところを見ると、王がこの慣習を実利だけでなく、エンタテイメントとして認識しており、さらに自分も気に入っていたと考えられる (Simpson and Roud 303)。18世紀末、既にrushbearingの意義も薄れた時代になってからの、Middletonの町での見聞記によると、この行事のエンタテイメント性のみが生き残った様子が見える。Barry Reayによると、

Amidst dancing, playing of music, and the ringing of morris bells, the carts perambulated the town, stopping at every public house, before ending up at the church. The ritual fiction was that the rushes were for the interior of the church, but in fact they were either given to the church for disposal or sold off to the highest bidder. The participants....then repaired to the beer houses for a night of drinking and dancing. (Reay 137)

騒々しい、安息日を侵す、などの不満が叫ばれ、may pole、morris dance、ale、wake等々の娯楽習慣と並んでpopish customのひとつとして清教徒に非難されたが、rushbearingは宗教劇ほどには抑圧されず、従って革命期を越えて生き残った。<sup>(1)</sup> 18、19世紀になってほとんどの床が木で作られ、イグサを教会や館に敷く必要がなくなるとこの習慣は徐々に衰える。しかし、現在に至るまで続いているところもあり、また、一旦消えていた慣習を復活する地域もあるという (Simpson and Roud 303; Kightly 199-201)。

## 2 Bearbaiting

bearbaitingは文学史家や演劇史家の間ではシェイクスピアやルネサンス演劇に関連して語られることが多かったと思われる。<sup>(2)</sup> チューダー朝ロンドンでは、bearbaitingは演劇にも負けぬ人気を持つエンタテイメントであったようで、グロブ座などが作られたテムズ河畔には、劇場の出現以前に既にThe Paris Gardenなどのbearbaiting用のアリーナがあり、その外形は当時の俯瞰図で見ると、パブリック・プレイハウスと何ら変わるところがないように見える (Wickham 121-22)。1546から1576の間に6つのbaiting arenaがBanksideに存在したとPeter Thompsonが書いていることから、ロンドンでのこの娯楽の人気が推測できる (Thompson 37)。これらの残酷なblood sportsのアリーナが、輝かしいルネサンス劇場のモデルの1つを提供したのは明かであり、劇場とこうしたbaiting arena

の物理的な違いは、ステージと tiring house を設置するか否かだけだったとも言える (Thompson 38)。実際、The Hope など、プレイハウスと bearbaiting arena の双方に使われた場所さえあった (Wickham 122; Ashley 177)。The Globe や The Rose などテムズ河畔の劇場では、近隣の bearbaiting arena から動物の臭気が漂ってきたり、熊や犬の鳴き声などが聞こえたかも知れず、それらは否応なくルネサンス劇のバックグラウンドとならざるを得なかっただろう。Alexander Leggatt は種々のシェイクスピア作品に現れる bearbaiting のモチーフを分析している。例えば King Lear において、Gloucester が Regan と Cornwall に責め立てられ、ついには目をくり抜かれる場面は、さながら bearbaiting において杭 (stake) に繋がれた熊が犬に取り囲まれ、そして目を潰されるシーンを彷彿とさせる。覚悟をした Gloucester は、"I am tied to the stake and I must stand the course" (King Lear, 3.7.53) と語る。Gloucester のヒロイックな反抗心と哀れな盲目の姿は、当時の観客に、犬に追い立てられ最後の抵抗を示す熊を彷彿とさせただろう。

演劇役者達の社会的地位が割合低いこととは裏腹に、熊使い (bearward) は現代人が思う程卑しくはなかったかもしれない。もちろんルネサンス期においても bearbaiting への反感がなかったわけではなく (Leggatt 43-44)、当然清教徒からの強い反発はあった。しかし、18世紀にこういった blood sports への嫌悪が高まるまでは、大多数の人々にとって、bearbaiting はなんら卑しむべき娯楽ではなかった (Simpson and Roud 27)。<sup>(3)</sup> Lord Admiral's Company の主要な俳優であった Edward Alleyn は、プレイハウスにおいてのスターであると同時に、王室の熊使い頭 Master of the King's Bears、でもあった (Wickham 121)。もっとも Alleyn が日常的に自分の手を汚して熊を操っていたとは考えにくく、彼の使用人を使っていたのだろう。しかし、Henslow と共に計算高いビジネスマンでもあった彼は、王室に仕えることに加えて、収入を提供するこの仕事を都合の良いものと思っていただろう。中世・ルネサンスのイングランドの君主達がこのスポーツを好んでいたという言及は多い。王室に熊使い頭の役職を置いたのは Henry VIII であるし (Ashley 174)、彼の娘達と言えば、Mary も Elizabeth も bearbaiting を好んでいた (Chambers 2:57-58)。Elizabeth は外国の賓客をもてなすのに bearbaiting を見せるのを常としていたようである。1591年、Elizabeth の枢密院は、彼女の演劇への関心にも関わらず、bearbaiting がロンドンで催される木曜日には劇を上演しないよう命令を出し、この荒っぽいスポーツを保護している (Chambers 2:58; Ashley 177)。

ロンドンにおけるこうした bearbaiting の人気から見ても、地方でも多かれ少なかれこのエンタテイメントが行われていたことは想像に難くない。REED シリーズはその推測に十分過ぎる程の具体例を与えてくれた。本論で扱っている REED: Lancashire の記録だけでも、bearbaiting が地方の小さな町や村でさえ普通に見られたことが分かる。彼らが当時の記録に登場するのは、主として裁判記録なので、何か当局や住民ともめ事があった折に我々の目につくに過ぎないのだが、それでも、具体的な bearward の名前が繰り返して出てくることさえある。

1例に過ぎないが、1617年の Litherland の町における裁判での告発 (presentment) に、次のように bearward が登場する：

...Wee present that Iohn Iohnson late of litherland in the countye of lancaster husbandman the fourthe day of Maye in the ffyfteenth yeare of the Raigne of our Souerainge lord kinge Iames of England &c beinge the Saboth day at litherland afforesaid did keepe and maynteyne att his house there Beare Beatinge & fidlinge in greate profanacion of the Saboth and that Hugh Whitstones late of Ormeskirke in the countie of lancaster laborer and Thomas Whitstonennes of Ormeskirke in the

countye of lancaster laborer then and there did beate there beares and that Richard pooley late of  
of Prescott in the countie of lancaster laborer did then and there playe of a fiddle and did profayne  
the Saboth contrarye to the peace of our Soueraigne lord the kinge... (REED:Lancashire 32)

この資料に出てくるHugh and Thomas Whytestones of Ormskirkは、REED:Lancashireの編者であるDavid Georgeによると、Ralph Whitstonesの息子であって、Ralphには他にRichard Whytestonesという息子、Griffith Whytestonesという孫がおり、彼ら5人全員がbearwardである。<sup>(4)</sup>このようなbearwardの一家の存在をあぶり出したのは、REEDのおかげであり、大変興味深い。確かに、bearbaitingというのはかなり危険で特殊な仕事であり、誰にでも出来ることではない。熊の維持、飼育から実際のbaitingにいたるまで、相当な技術を要するだろう。また、これを収入に結びつけるためには、いつでも出来ることではないだろうから、興行場所の確保などにおいてあらかじめ当局や地域の住民との了解が必要であっただろう。役者や楽士以上に、彼らが興行する時と場所は一種のルーティンを持っていたのではなかろうか。そうした技術や地域社会におけるコネクションは、1つの家族の中で伝えられるのが便利であっただろう。

彼らの仕事の危険性は、REED:LancashireのOrmskirk、1637～38年の記録にうかがわれる：

To the worshopful Benche health wished & Griffy Whystones a pore lame mannr/

These are to lett your worships to vnderstand that Griffy Whystones of our towne of Ormskirk is most daungerly wounded with one of his Beares & is in greate [great] feare to be lamed by that accidnt & misfortune hee moste humlie beseecheth your worships, to take it in comiseracion, in Regard of his great woudes, and misaries, hee beinge not able to goe or Ryde, his humble sute is that you would spare his Recullisons vntill the next Sessiones of the peace [in] hopeinge in god hee will bee then able to make his apparance [then] then... (REED:Lancashire 74)

この文は、外科医を含む4人の人物によって裁判に提出された嘆願書であるが、Whytestones家のbearward、Griffithが熊にかなりの重傷を負わせられたことが分かる。さらに、CheshireのBunburyでは1628年に、Robinsonという名のbearwardが熊に引き裂かれて殺された、という記録もある(Baldwin 1997, 29)。こうした激しく暴力的な職業の特徴は、彼らbearwardの行動パターンや性格を変えるのであろうか。1599年のLeylandの裁判記録には、Richard WhytstonesとJames Harrison of Crostonが喧嘩をし、血を流したことが記されているが、両者共にbearwardである(REED:Lancashire 31)。同様のトラブルの記録は、Garstangの町のbearward、William Foxに関しても、1638年に存在する(REED:Lancashire 30-31)。編者David Georgeは、注において、"in keeping with their harsh trade, bearwards were often involved in physical violence"とコメントしている(REED:Lancashire 320)。

REED:Lancashireに現れるbearwardの記録の中で、Whytestonesの一族以外に注目される個人というと、Earl of Derbyのbearward、John Sekerstonだろう(彼の名前は、Sekerston、Sakerston、Sackerstonなど種々の綴りで書かれている)。彼はREED:Lancashireではただ1度のみ言及されている。1574～75のLiverpoolの記録において、彼に6シリング8ペンスが支払われたと記されている(REED:Lancashire 41)。しかし、大貴族お抱えのbearwardとして、彼の活動範囲は大変広く、各地で興行をしているのが分かる。Elizabeth Baldwinは彼の活動をREEDの各巻やその他の1次資料で調べて

いるが、<sup>(5)</sup> REEDでは、Liverpool、Bristol、Coventryなどの都市において、16世紀後半の記録で登場し、また、同一人物かははっきりしていないがCheshireやShropshireの記録にも彼らしき同名の人が見えるということだ。Liverpool、Bristol、Coventryの3都市はイングランド南部から北部へと散らばっており、これをJohn Sekerstonが熊を連れて興行して回ったとすると、当時のエンタテイナー、特にbearwardとしては、大変広い行動半径を持っていたと言える。

さて、彼の本拠地はどこなのか。Elizabeth Baldwinによると、Chesterの南東、Stoke-on-Trentに近いNantwichの記録では、John Sekerstonという人物が2人現れ、恐らく親子であると見られている。この親子のうち、息子はNantwichにthe Bear Innという名の宿屋を所有していると同時に、熊を育てて売っており、the Earl of Derby's bearwardでLancashireのLiverpoolにやってきたJohn Sekerstonである可能性が高い。少なくとも一時期には4頭もの熊を飼っており、また、"Gentleman and Freeholders Resident in Nantwich"と記録されているので、かなり裕福な人物であったようだ。恐らく彼はthe Earl of Derby's bearwardであると同時に、彼の宿屋に客を呼ぶ重要な魅力としてbearbaitingを興行していたに違はなく、それだけbearbaitingは当時の人々にとって魅力的なスポーツであったわけだ。

REED:Lancashireに目を向けると、John Sekerston of Nantwichのように、bearbaitingの人気を人集めに利用した例が見える。1590年のMyerscoughの裁判記録では：

...And (the jurors present) that Christopher Poulton, recently of Myerscough in the county of Lancaster, alehouseskeeper, permitted a bear-baiting near his house on a Sunday and maintained and kept supporters of the same baiting in his house... (REED:Lancashire 301, originally in Latin)

これは酒場の客集めにbearbaitingが利用された例だが、このような例は他の記録にも当てはまるかも知れない。というのも、bearbaitingが開かれている場所が単にある人物の家（あるいはその敷地）であるとは分からない場合（例えば、既に引用したOlmiskirkのJohn Johnstonのケースのように）、その人物が酒場の主人であるのは、大いにありそうな話だからである。

小さな町でしばしば娯楽の機会を町民に提供したaleもまたbearbaitingが催される機会であった。Newton in Makerfieldの裁判記録では：

*contra* Willimum Ridyat de Newton

for prophaning the sabbaoth with pypinge & Bearbaytinge by reason of an Ale hee then had, & pypinge still vsed in Newton... (REED:Lancashire 72)

このWilliam Ridyatがどういう人物なのか、彼がbearbaitingを催したのは営利が主目的か、又は仲間内の楽しみかは明かでない。しかし、aleは酒場に特別な収入をもたらす機会でもあっただろうから、酒場の主人達が利用しないはずはなく、そこでアトラクションとしてbearbaitingが行われたはずだ。1616年のCheshireのBunburyにおいて治安判事に提出された苦情の記録がそれを良く物語る。Elizabeth Baldwinの転写した記録を引用する：

There is an evill Custome within this Countye of Chester, that in every Parrish once in the yeare they keepe Wakes, as there is noe one reason to maintayne the vse, soe there is manye that it sholde not be vsed./



...

These Alehousekeepers to drawe people the rather to come, procure Berewardes and their Beares, minstrells, Iuglers and such like to make the people sporte./ (Baldwin 1997, 27)

また、1624年頃のLancashireのWiganでは、All Saints' Dayの祝日の折に、地元の教会のwakesが祝われ、その時には市が立つ。そしてその折の習慣としてbairbaitingをすることになっているとの記録がある (REED:Lancashire 104)。

こうして見ると、Lancashireの記録からだけでも、bearbaitingは人の集まるような種々の行事において、広く見られたことが想定できるだろう。Somersetのbearbaitingを調査したJames Stokesも次のように述べる：

Most of the presentments in May and June mention the baitings in connection with Whitsun or Midsummer ales, those in July through August with ales, revels, and the feasts of local patron saints (Stokes 70)

Lancashireの記録でほとんど欠如しているのは貴族やジェントリー世帯の記録(household accounts)におけるbearbaitingである。彼ら富裕な層はロンドンや他の地域ではこの娯楽の重要なパトロンであったのだが、Lancashireの大きな屋敷の記録にはその痕跡は少ない。これは、ひとつにはLancashireが人口の少ない、大都市から離れた地域であったことに原因があるのかもしれない。REED:Lancashireでは唯一、SmithillsとGawthorpeのShuttleworth家の1612年の記録において、1人のbearwardへの賃金支払い記録がある (REED:Lancashire 173)。それにしても、多くの屋敷で種々の芸人を雇いながら、bearwardの記録がほとんどないのは不思議である。<sup>(6)</sup>

修道院やカテドラルなどでも種々の演劇が行われ、また、芸人が雇われて支払いがされているのは良く知られているが、LancashireのWhalley Abbeyでは、1488年から1536~37年 (この修道院の解散は1538年) の記録まで、ほぼ一貫してbearwardに賃金を支出している。編者のDavid Georgeによると、ここの修道士の数は1381年で24人、1538年の解散時で13人に過ぎなかったというが (REED Lancashire xxxiii-xxxiv)、彼ら自身の楽しみのためのbearbaitingであろうか。この残酷なスポーツがどのような形で修道院で行われ、どういう観客を集めていたのか興味の沸くところだ。

## 結び

Lancashireの民衆娯楽はここに述べた2点の他にも色々ある。特に、*Records of Early English Drama*の名にふさわしい演劇や役者に関する記録もかなりにのぼる。しかし、それらの検討はまたの機会に行うとして、REEDの発掘したユニークな資料であるrushbearingとbearbaitingについて点描し、演劇文化のすそ野をなす民衆のエンタテインメントの研究の一端とした。

注

- 1 チェスター司教区におけるrushbearingを調査したElizabeth Baldwinは、rushbearingも国教会忌避者 (recusants) と結びついていると考えられていた、と述べている。しかし、その関係はそれほど強いものではなく、結論として、"less a recusant activity than a wish to annoy the authorities and enjoy forbidden activities"と結んでいる (Baldwin 1996, 39)。
- 2 Leggattの論文が、特にbearbaitingとシェイクスピア作品の関係について掘り下げて論究している。
- 3 Leggattは、この娯楽が公には禁止された後も密かに続けられ、John Keatsも見て、楽しんだ、と指摘している (Leggatt 43)。
- 4 David Georgeの注による (REED:Lancashire 330)。
- 5 以下のJohn Sekerstonについての記述は、Baldwin 1998による。
- 6 今後この点について、他の地域との比較研究をしていきたい。

Works Cited

- Ashley, Leonard R.N. *Elizabethan Popular Culture*. Bowling Green, OH: Bowling Green Popular Press, 1988.
- Baldwin, Elizabeth. "Rushbearings and Maygames in the Diocese of Chester before 1642." *English Parish Drama*. Eds. Alexandra Johnston and Wim Hüsken. Amsterdam: Rodopi, 1996. 31-42.
- . "Reformers, Rogue or Recusants? Control of Popular Entertainment and the Flouting of Authority in Cheshire before 1642." *Records of Early English Drama Newsletter* 22.1 (1997): 26-31.
- . "John Seckerston: The Earl of Derby's Bearward." *Medieval English Theatre* 20 (1998): 95-103.
- Chambers, R. *The Book of Days*. 2 vols. London, 1864; rpt. Tokyo: Meicho Fukyukai, 1984.
- George, David, ed. *Records of Early English Drama: Lancashire*. Toronto: University of Toronto Press, 1991.
- . "Rushbearing: A Forgotten British Custom." *English Parish Drama*. Eds. Alexandra Johnston and Wim Hüsken. Amsterdam: Rodopi, 1996. 16-29.
- Leggatt, Alexander. "Shakespeare and Bearbaiting." *Shakespeare and Cultural Traditions*. Eds. Tetsuo Kishi, Roger Pringle and Stanley Wells. Newark: University of Delaware Press, 1994. 43-53.
- Kightly, Charles. *The Customs and Ceremonies of Britain: An Encyclopaedia of Living Traditions*. London: Thames & Hudson, 1986.
- Reay, Barry. *Popular Culture in England 1550-1750*. London: Longman, 1998.
- Simpson, Jacqueline and Steve Roud. *A Dictionary of English Folklore*. Oxford: OUP, 2000.
- Stokes, James. "Bull and Bear Baiting in Somerset: the Gentles' Sport" *English Parish Drama*. Eds. Alexandra Johnston and Wim Hüsken. Amsterdam: Rodopi, 1996. 65-80.
- Thompson, Peter. *Shakespeare's Theatre*, 2nd edition. London: Routledge, 1992.
- Wickham, Glynn. *A History of the Theatre*, 2nd edition. London: Phaidon, 1992.